

小澤愛囷校訂

帝國文庫
第十一篇

忠臣藏淨瑠璃集

全

東京
博文館版

解題

小澤愛園

元祿時代は其の氣分に於て徳川時代の絶頂である、人文の上に於てのみならず工藝の末に至るまで盛世の氣分が溢れて居ると近世日本國民史の著者はいつて居るが、確にこの時代は徳川氏の治世に於ける黄金時代といつてよからう。併し其の一面に於ては上下泰平になれて奢侈の風漸く行はれ幕府に於ては柳澤吉保ひとり權を擅にして賄賂公行の世となつたのである。日南居士の所謂元祿の快舉もその原はといへば實はこの賄賂のことから端を發したものであるといつてもよからう。

淺野長矩が吉良義央を殿中で傷けたのは元祿十四年三月十四日のことで、翌くる十五年十二月十四日の雪の夜には吉良家討入復讐、翌くる十六年二月四日には一件落著四十七士切腹と實に事件はどしどし進んでどしどし片づいて居る。武道漸く衰へ士風遽に頽れて來たこの時代に、この義士の快舉——快舉といふ言葉を用ゐるに就ては從來議論もあるやうだが此處では別に問題にするにも當るまい——は上下を驚かし世の清涼劑となつたに違ひない。徳川氏治世以來敵討は武士の道徳であるから別に不思議はないが、併し其の多くは親族關係の敵討であつて君主の爲に仇を報じたのは絶無であるといふからこの大石良雄等の壯舉が當時異彩を放つたのは無理もないことである。本懷を遂げてから義士は細川、久松、毛利、水野の四家に夫れ御預けとなつたが、彼等に對する待遇は寧ろ戰功者に對するが如くてあつて幕府をはじめ一般の人氣は彼等に傾倒した。隨て事件落著後の世間の同情は益々彼等に集まり四十七

士はこよなき忠臣と謳はれやがて淨瑠璃や歌舞伎狂言にも仕組まれ競うて各座に上演せらるゝに至つたのである。

最初に義士の一件を取り入れたのは、事件落著後僅か十二日を経た元祿十六年二月十六日から江戸中村座で曙曾我夜討の狂言で少長の曾我十郎と傳吉の曾我五郎が吉良家討入を擬して演じたが、公儀に遠慮して僅か三日で中止したといふ。この事は忠藏類聚大成自序の初にも記されてある。元祿十六年の翌年は改元して寶永、同六年正月に將軍綱吉薨去、六代家宣の世となり、翌くる七年大阪でも京都でも忠臣藏は歌舞伎に演ぜられた。大阪では寶永七年篠塚庄松座で吾妻三八作の忠臣藏狂言、篠塚次郎右衛門の大岸宮内、佐野川萬菊の力彌で大當り、大岸宮内といふ假名のはじめであるといふ。義士の一件が操淨瑠璃に仕組まれたのは三年を経た寶永三年五月大阪竹本座で近松門左衛門の兼好法師物見車、同六月その追狂言碁盤太平記に端を開くのである。元祿、寶永、正徳、享保、元文、寛保、延享、寛延、寶曆、明和、安永、天明、寛政、享和、文化、文政、天保、弘化、嘉永、安政、萬延、文久、元治、慶應といふ順序を経て徳川氏の治世は終つたが、此の間百五十餘年、忠臣藏の淨瑠璃及歌舞伎狂言は絶えず世に現れて其の數枚擧に達しない程である。明治から大正にかけても筆者の記憶だけでも十數種の狂言が出て各座に上演せられて居る。古いところでは嘉永三年春の刊行に係る西澤一鳳の忠藏類聚に主要なものは概ね含まれて居るから左に摘録することにする。

淨瑠璃	碁盤	太平記	上	下
同	忠臣	金短冊	五段	續
歌舞妓	鐙櫻	故郷錦	八段	物
同	忠臣	いろは軍記	九段	續
淨瑠璃	忠臣	いろは夜討	五段	續

寶永三戌年五月五日ヨリ
竹本座作者近松門左衛門
享保十八丑年十月朔日ヨリ
豐竹座作者並木宗輔
享保廿卯年三月十一日ヨリ
江戸中村座作者澤村訥子
享保廿卯年九月十八日ヨリ
江戸市村座作者津打治兵衛
元文三年七月十五日ヨリ
京東芝居作者宇治加賀藤

同	花	菖蒲	いろは連歌	四十七段	天保十二丑年五月十日ヨリ 江戸市村座作者西澤一鳳
同	紅	楓	いろは文庫	十一段	天保十三寅年七月廿一日ヨリ 角の芝居作者西澤一鳳
同	いろは	藏	双合鑑	十冊物	天保十六年三月四日ヨリ 伊勢古市芝居種々寄もの
同	裏	表	忠臣藏	廿二段 幕なし	天保十一年三月七日ヨリ 江戸河原崎座作者中村重助
同	増	補	裏表忠臣藏	廿二段 落ありなし	天保十五辰年三月七日ヨリ 角の芝居作者西澤一鳳
段	大石	摺	義士法帖	十一冊	天保年間作者西澤一鳳 天保年間の作未だ出さず
淨瑠璃	忠臣	國字	警	四十七枚	天保年間の作近々出版 作者西澤一鳳

忠誠類聚以後今日に至るまで忠臣藏に關する歌舞伎狂言や淨瑠璃は少からず刊行せられて居る。例へば南北の菊宴月白浪を始め默阿彌の作に至つては其の數が少くない。櫻地居士其の他最近に至つても新しい義士劇は折々上演せらるゝを見るのである。本書の内容は舊帝國文庫忠臣藏淨瑠璃集に輯めたものと略ぼ同じものを年代の順に輯録してある。尙ほ紀海音の鬼鹿毛無佐志鐙を入れることにした。これはたゞ編輯の都合からて別に他意ある譯ではない。

兼好法師物見車及追狂言基盤太平記が赤穂義士一件が操淨瑠璃に仕組まれた端緒であつて此の二書が忠臣藏の源流であることは前に述べて置いたが、物見車には兼好法師が高師直に鹽治判官の奥方をとよりもつ事、大星は八幡六郎といふ役名であつたのを基盤太平記では世を忍ぶため名を變へて始めて大星由良之助と名乗つて居る。

この淨瑠璃の筋のあらましをかいつまんで言へば、鹽治高貞の執權八幡六郎は主家滅亡後大星由良之助と名を變へて世を忍び、老母女房の意見も餘所に日夜酒色に耽つて居る。併しこれは主君の仇高師直に油斷させる爲てその實はひ

そかに同志の士と氣脈を通じて復讐の機を待つ。仲間岡平これに鹽冶の家臣であるが、由良之助の一子力彌は彼が高家よりの密書を読むを見て一刀の下に斬り付ける、蟲の息の岡平實は寺岡平右衛門は大星父子の懇望によつて師直の邸の案内を明かす、由良之助はその様子を聞きながら基盤に黒白の石を並べて詳細に會得する。同志一同苦心の中斐あつて敵師直油斷の時節到來、いよく仇討の首途、母妻は遂に自刃して由良之助父子を激勵する。勇士師直屋敷討入、本望成就といふのである。物見車と基磐太平記とに就ては高野博士の研究が參考となることが多い。

鬼鹿毛無佐志鐙おどかひけむさしんどうは紀海音正徳三年の作で同十二月一日豊竹座に上演したとある。紀海音は榎並氏で俗稱を喜右衛門といひ後に善八と改めた。紀海音は淨瑠璃作者の號に用ゐたのである。近松門左衛門竹本座に世盛りであつた頃豊竹座の作者となつて同座の創業を助けたのである。其の著作は約四十種あるが、八百屋お七、傾城國姓爺、鎌倉三代記、心中二ツ腹帯等世に聞えて居る。傾世國姓爺は正徳三年の作でそれに次で鬼鹿毛無佐志鐙を著して居る。次に輯録した忠臣金短冊、假名手本忠臣藏などもこれに據つて趣向を凝した筋が少くないといはれて居る。この狂言は寶永七年六月大阪篠塚座で鬼鹿毛武藏鐙と題してこれを演じ好評を博したとある。

忠臣金短冊ちゆうしんこんたんさくは一谷嫩軍記の作者並木宗助及小川丈助、安田蛙文等の作で、享保十七年十月豊竹座に上演した。赤穂義士の復讐を小栗横山の時代にとり、足輕寺澤七右衛門親子及早野勘平夫妻の苦忠、大岸由良之助の島原に於ける遊蕩、山科の別れなどは後の忠臣藏の粉本となつたといはれて居る。大詰討入の場に於て義士一同が金の短冊にその名を記して脊につけるのが題名の出づるところとなつて居る。

忠臣藏狂言中最も人口に膾炙して居るのは假名手本忠臣藏である。（これはほんていしんしんぞう）この狂言に就ては多く説明を要するまでもない

が、大體に就て言へば、竹田出雲、三好松洛、並木千柳三者の作、十一段續きの淨瑠璃で、忠臣藏狂言の先驅をなす歌舞伎操を大成したものである。寛延元年八月竹本座に上演して古今の大當り、直に三都の歌舞伎に移され操と同じく忽ち大評判を得た。其の後約二百年の間今日に至るも尙ほこの狂言は忠臣藏の權威として歌舞伎でも操でも興行毎に常に大入を續けて居るのである。竹本座に上演せられた寛延元年の暮には大阪嵐三五郎座に上場、江戸では翌寛延二年二月森田座上場、同年五月には市村座上場、同六月には中村座上場、京都では寛延二年三月中村松兵衛座上場、いづれも三都の名優によつて演ぜられた。忠臣藏上演の際には操でも歌舞伎でも幕あきの前に口上人形が出て役割を觸れるのが普通であるが、歌舞伎では實人の俳優が人形振りで勤めることがある。幾多の名優に演ぜられてゐるうちには新しい趣向も加へられ演出の上にも種々の工夫が行はれた。即ち繰り返し／＼上演せられて居るうちに歌舞伎獨得の特色を發揮し型に於ても變遷があつて成長發達し今日に至つたのである。例へば四段目八段目道行で義太夫節で表し難い情調は優艶な江戸淨瑠璃を以てこれを補ふやうになつた。また五段目の定九郎の型の如きも、最初は大百日靈に大縞の襦袍、丸ぐけの帶、山岡頭巾、紐付の股引といった大袈裟な山賊の形であつたのを初代中村仲藏の工夫によつて五分月代に黒小袖、腕まくり尻からげ蛇の目傘といふ今日の様な浪人姿に改めたのは有名な話である。此狂言の梗概に就ては此處にくど／＼言ふまでもあるまい。

難波丸 金鷄（なんばのたまご）は寶曆九年五月豐竹座上演十三段物の操淨瑠璃で若竹笛舩、豐竹應津、中邑阿契の作。近松の淀鯉（よどぎ）

出世瀧徳（しやうせいのとく）の醜案に忠臣藏を取合せたもので、第一鎌倉泉岳寺の段、住吉穀松原の段、勝間堤の段、北濱淀屋の段、

第二天満老松町の段、瑞見山飯綱の段、諸人一代道中記（ふし事）、道行者葉裳（宮古路國太夫ふし）、天神お旅の段、

第三木津川堤の段、三軒屋借座敷の段、第四伏見京橋の段、深草砂川の段、第五八幡敵討の段で終つて居る。

いろは歌義臣^{うたぎしん}釜は明和元年二月豊竹座の操に上演の十一段物で、黒藏主、中邑阿契の作。忠臣藏を小栗横山の時代にとり、大體の筋は忠臣金短冊に據つて居るが、假名手本忠臣藏に負ふ所亦少くないといはれて居る。殊に十冊目山科閑居の段は第九と役名の相違を見るのみで同文である。同月一方竹本座では假名手本忠臣藏を出して居る。

太平記忠臣^{たへいきしん}講釋は明和三年十月竹本座操に上演、作者は近松半二、三好松洛、竹田伊豆、竹田小出、筑田平七、竹本三郎兵衛等で、その結構文章、假名手本忠臣藏にさへ劣らぬ名作と評され、今日でもなほ屢々歌舞伎に上演せられて居る。第一鎌倉御所刃傷、第二赤穂城中大星留守居、蜂の争、評定、第三大星かほよに偽りの慕戀、義士のかため、第四斧九太夫の妻お禮白川に兵法指南、切、翠の段、第五縫殿之助浮橋島邊山道行、第六重太郎の妻おりゑ惣家の段、第七喜内住家、第八山科閑居安兵衛上使、大星出立、第九天河屋義平拷問、第十討入。主なる作者近松半二に就て一言すれば、半二は浪花の儒家穂積以貫の子である。以貫資性頗る豪放不羈、近松門左衛門と親交があつた。半二は父の資性を承け詞才もあつたが、性質懶惰のため儒業を修めず淨瑠璃を作ることゝを學び遂に名を成すに至つたのである。著せし狂言數百種ある。傾城阿波の鳴門、伊賀越道中双六、妹背山婦女庭訓、太平記忠臣講釋、關取千兩幟、本朝二十四孝、新版歌祭文等は佳作として人口に膾炙し、今日でも屢々歌舞伎操に上演せられて居る。

忠臣^{ちゆうしん}後日^{ごにち}漸は安永元年四月北堀江竹本座の操に上演の上下二段物、北脇素人、中邑阿契、豐蘆州、若竹笛躬等明和九年四月の作である。標題の如く赤穂義士の復讐の後日譚であつて、四十七士が本懐を遂げた後、桃井若狹助の邸に

預けられた間のお石、小浪、おかる等の活動を描いた上下二巻ものである。

巖方武士鑑は近松半二、松田ばく、寺田兵藏、榮善平、竹本三郎兵衛等明和九年四月の作。假名手本忠臣藏の改作で安永元年四月竹本座の操に上演の十段物である。

いろは藏三組 盃は安永二年七月竹本座の操に上演の十段物で、近松半二、近松金三、近松東南等の作。六つ目淀屋の段、七つ目宿がへの段、八つ目女大學の段等世に知られ、是等は文政頃に至るまで屢々操座に上演せられてゐる。

忠臣伊呂波實記は安永四年七月肥前座の操に上演の十一段物で假名手本忠臣藏の続案、福内鬼外の戯作である。作者福内鬼外は本草學者として有名な平賀源内のことである。源内は福内鬼外と號して餘技に戯作に筆を染めて利を得たのである。人も知る神靈矢口渡世に出づるや特に世人の喝采を得、尋て源氏大草紙或は金毘羅利生記其の他院本等に屬する戯作しやれ本等數十種を作つて居る。

夢景色雪の茶會は天明七年九月豊竹座の操に上演の十一段物、若竹笛躬、丹青堂、梅野下風等の作。

忠義墳塲約大石は忠臣藏の外傳ともいふべきもので此芝居は幕なしにて興行する。寛政九年二月豊竹座の操に上演の十一冊物、若竹笛躬、中村魚眼、並木千柳等の作。

忠臣一力祇園曙は寛政十年八月堀江此太夫座の操に上演、司馬芝曳作九冊物である。建長寺山門、大書院、櫻の

馬場、奥方揃、添削、鎌倉御所、大屋屋敷、郊外、川狩（此處より三十年以前の時候）、宮内屋鋪、祇園の曙、繩手、一力表、一力内、早野村、道行春の富士、師直屋敷裏門、勢ぞろへ、敵討て終つて居る。忠臣藏の改作物で大序より大切まで早幕早道具四十七段返して興行する。

—— 解題終 ——

目次

嫌好法師基 あとおひ	盤	太平記	一
鬼鹿毛	無佐志	鑑	一九
忠臣	金短冊	冊	四五
假名手	木忠臣	藏	九三
難波丸	金鷄	鵄	一五
いろは歌	義臣	整	二二七
高師直 隠存判官	太平記	忠臣講釋	三〇五
忠臣	後日	嘶	三七三
躰方	武士	鑑	三九七
時代詩繪 世話模様い	ろは藏	三組盃	四六三
忠臣	伊呂波	實記	五二三
石高は千五百 册歌四十七廓	景色雪の	茶會	五八七
忠義墳	盟約	大石	六四九
風雅でなし 洒落でなし	忠臣	一力祇園曙	七〇九

